

interview

病気の治療や QOLの改善のための選択肢、 栄養療法や栄養点滴療法を 導入しませんか？



アリスどうぶつクリニック

院長 廣田 順子 先生

動物病院は全科診療が主体で、多くの症例を日常診察しております。

年齢別に病気を見ますと、3~6才頃までは皮膚病、アレルギー疾患、消化器疾患が多く、7才頃より慢性の疾患そして、がんが多くなります。

7才という年齢は動物種にもよりますが、人でいう40才前後に相当します。この年齢頃より、肥満、生活習慣病、肝臓病、心臓病、腎臓病、消化器疾患、糖尿病、椎間板・関節疾患、歯周病、多くの慢性の疾患が多くなり、最近多いのがんで、2頭に1頭はがんになると報告されております。

血液検査結果で問題ないのに、被毛がパサパサ、食欲の低下、元気がないという様な症状で来院する動物も多く、血液検査を分子栄養学的に解析すると多くの分子栄養素の低下の問題が見えてまいります。

その原因の多くはフードとおやつにあります。多くのフードはトウモロコシ、小麦などを原材料としている糖質過多のフードで、多くの病気の引き金と原因となります。

動物の健康維持に必要なのは、タンパク質の多い良質なフードです。犬・猫は原則肉食中心です。症例に適應する良質なフードを提案し、血液検査を栄養解析し不足が考えられる良質なサプリメントを与えます。それだけで改善する症例も多いのです。

慢性の病気及び、がんの症例に共通なのは、分子栄養素の低下でタンパク質、ビタミン、ミネラル類の低下が見られます。そのような症例にはさらにマイヤーズ・カクテル点滴療法を併用します。

動物の点滴療法は静脈と皮下にも行うことができます。静脈点滴は血管が細く脆い、小さな動物には長期間の点滴は難しいため、**マイヤーズ・カクテルは皮下点滴を行うことが多く、アンチエイジング、QOLの改善や延命効果が期待されます。**

がんの治療には、高濃度ビタミンC点滴療法、マイヤーズ・カクテル、オゾン療法をまず勧めます。そして糖質制限のフード、リポ・カプセルビタミンC、総合栄養剤、抗酸化ミネラル、EPA/DHA、食事療法と可能な範囲のサプリメントを提案します。

末期のがん症例の改善例を多く経験しており、動物医療にとっても有効な治療法になっています。

薬剤は対症療法、栄養は根本療法で病気の進行を止めて自らの細胞が回復するようにサポートする。それが栄養療法の根本的な考え方です。

動物への病気の治療やQOLの改善のための有効な選択肢である栄養療法や点滴療法を導入してみませんか？



当院の外観

参考書籍のご紹介 「愛犬の不調は糖質が原因だった!」



この本は分子栄養療法をもとに犬の食事について紹介した、おそらく日本で初めての本になります。ワンちゃんに毎日の食事を楽しんでもらいながら、いつまでも元気で長生きしてもらおう。飼い主さんの願を叶えるヒントをこの本では伝えたいと思います。